

八王子を哲学する ～哲学カフェを通したく学び愛>の街づくり～

Community Development through Philosophy

伊藤貴雄ゼミ

岡本広大 大森綾子 河合爽佳 石井夏美 赤羽真桜 辻中正志

大洞涼太郎 ベゼラ・デ・ソウザ

指導教員 伊藤貴雄

創価大学 文学部 人間学科 伊藤貴雄研究室

東京 23 区には 30 を超える哲学カフェが定期的で開催されているが、八王子に拠点を置いたものはまだない。八王子は日本一の大学数を誇る学園都市であり、かつ大学の名誉教授など学者も多く住んでいる知的資源の豊富な市である。この街に秘められた「知の宝庫」をいまこそ市内外に広くアピールしたい。市民・学生・学者が世代を超えて交流する機会を提供するために、月 1 回、はちおうじ哲学カフェ「学び愛」を八王子にあるカフェで（できれば毎月場所を変えて）開催する。八王子初のこの哲学カフェを通して、知的交流が促進するプラットフォームの構築を提案したい。

キーワード：哲学カフェ・学び愛・八王子まちおこし・知的交流プラットフォーム・世代間交流

テーマ設定

哲学カフェを通して、世代・職業・分野をこえた知的交流のプラットフォームをつくり、人と人とのつながりを提供する。

現状分析

東京 23 区には 30 を超える哲学カフェが定期的で開催されているが、八王子に拠点を置いたものはまだない。しかしながら八王子は日本一の大学数を誇る学園都市であり、かつ大学の名誉教授など学者も多く住んでいる人的資源の豊富な市である。この八王子に秘められた「知の宝庫」をいまこそアピールしたい。

私たちのプラン

私たちは、八王子市が抱える大学数は多いのに学生間交流が少ない点、八王子市ではまだ哲学カフェが開催されていない点、八王子市民・学生・学者など分野を超えて交流する場がない点などを包括的に改善していくことが必要であると考えた。そこで、八王子市民・学生・学者など分野を超えて交流する機会を提供するために、八王子初の哲学

カフェを実施し、この三者間交流が促進するプラットフォームの構築を提案したい。

このプランを達成するための計画は以下の通りである。

1. 月 1 回八王子哲学カフェ「学び愛」を八王子にあるカフェ（できれば毎月場所を変えて）で開催する。
2. 運営主体は創価大学文学部伊藤ゼミ（今後、他ゼミや、他大学のゼミも含めて協力者を募る予定）
3. 参加対象は、知を愛する一般市民・学者・学生また、会によって特別ゲストを呼ぶ。（八王子在住の大学名誉教授や在野の研究者、学芸員、書店・古書店、等々）。
4. 「八王子と世界（シュリーマン、肥沼博士）」、「自然について（高尾山）」、「芸術について（美術館）」、「読書について（書店・図書館）」等々。
5. 会場には、八王子にあるコラボしていただけるカフェやゲストを中心にこれから交渉予定。
6. 波及効果としては、以下のようなものが考えられる。学生に八王子のカフェや文化施設を知ってもらえることができ、SNS で拡散してもらい、拡散してくれた人にはクーポンを用意し、割引をする

事で宣伝効果も期待できる。また、定年退職した学者が若い人と接する場になる。市の文化的イベントの存在や魅力も宣伝できる。

進捗状況

八王子在住の方を対象にしたアンケートを実施し、八王子にする前と住んだ後でのイメージの変化、八王子市に足りないと感じているものは何かを調査しデータを集計し、分析した。

また、八王子駅北口商店街会会長・清水栄様、Dr. 肥沼の偉業を後世に伝える会の方々とコンタクトを取り、私たちの活動に協賛を頂いた。

今後の課題

準備状況を踏まえて、2点の課題が浮上した。まず、1点目に広報面である。費用のかからないSNSで哲学カフェの告知をしようと考えているが、それだけでは対象者が若い世代のみと限られてしまう。また、私たち自身が学生ということもあり、告知できるネットワークには限りもある。そこで、SNSを利用しない市民、特に年配の方々にも告知をしたいため、広報八王子に掲載する・公共施設等へのポスター許可などの協力を申請したい。そうすることで、より広範囲へ告知が可能である。2点目に経済面である。仮に、毎月1500円でカフェを借りるとしても、学生で出費することは可能であるが、継続性は見込めない。奨学金を借りている学生も多いため、負担も大きい。さらに、他の費用として講師として名誉教授を招く際は、謝礼が必要である。仮に、教授が不要であるとの意を表していても、お招きさせていただく以上は何かしらの謝礼が必要である。したがって、以上の2点が今後の課題である。

市への提案

上記で述べたように、広報八王子等への掲載を提案したい。また、八王子でイベントを主催されている方にも哲学カフェに来ていただき、今後の八王子イベント紹介も行いたい。そうすることで、学

生、教授、市民が一体となり新たなイベントの提案も可能になる。そうした人脈の紹介も提案したい。

参考文献

朝日新聞（2018. 5. 25 付け）